

二世の音楽家達を聴く **ダヴィッド・オイストラフと ルドルフ・セルキンの息子達** 第2回

プログラム

今日は二世音楽家達にスポットを当てるシリーズの第2回目です。

ピーター・セルキン (1947～) は父が巨匠**ルドルフ・セルキン (1903～1991)**、母は名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュの娘という音楽一家に生まれました。幼少の頃からピアノの才能を発揮すると1959年、セル指揮クリーヴランド管弦楽団との共演でカーネギーホール・デビュー。恵まれた時期を過ごしますが、偉大な父の存在が重くのしかかり、暫く音楽界から姿を消していた時期もありました。その後、“タッシ”という室内楽グループを結成して復活。以降小澤征爾、ブーレーズ、バレンボイム、アバド、ラトル等多くの名指揮者と共演、協奏曲、ソロ、室内楽と幅広い活動を行っています。父ルドルフが伝統的ドイツ・ピアノ音楽の継承者とすれば、ピーターは近現代音楽の良き理解者でもあり、父とは違った道で成功してきたピアニストでもあります。1881年に作曲されたブラームスのピアノ協奏曲第2番は4楽章を有する重厚な作品ですが、全体に明るく親しみやすさを持ち合わせた名曲。「世の終わりのための四重奏曲」は1941年ドイツ軍捕虜として収容されていた時に作曲、初演されたメシアンのカトリック的信仰から生まれた作品と言われています。ピーター・セルキンの演奏はブラームスでの若々しく澆漓とした演奏も聴きものですが、メシアンでの精緻で深淵な表現は見事な音楽空間を創り上げています。

イーゴリ・オイストラフ (1931～) は20世紀最大のヴァイオリニスト、**ダヴィッド・オイストラフ (1908～1974)** を父に持ちオデッサで生まれました。モスクワ音楽院で学び、1947年、バッハの「2つのヴァイオリンのための協奏曲」で、父との競演でデビュー。49年世界青年音楽祭コンクール、52年ヴィエニャフスキ国際コンクールで優勝、国際的な評価を高めました。53年のパリ・デビューで本格的な演奏活動を開始し、その後協奏曲、リサイタルにと世界的に活躍。1996年以降ブリュッセル音学院教授となり、後進の指導にもあたっています。父が20世紀を代表するヴァイオリニストであるため、常に影に隠れた存在であった事はイーゴリにとっては決してプラスにはならなかったかも知れません。しかし、確かな技巧、豊かな音色、力強い表現力など第一級の実力を備えた名ヴァイオリニストです。カルメン幻想曲はサラ・サーテの作品が有名ですが、ハイフェッツのために書かれたワックスマンの作品も次いで良く知れた作品です。1878年作のブラームスのヴァイオリン協奏曲は親友の名手ヨアヒムのために書かれた名作。どちらの作品でもイーゴリ・オイストラフの演奏は表現豊かで力感溢れる名演をくり上げています。

ヨハネス・ブラームス (1833～1897):

ピアノ協奏曲第2変口長調 *op.83* ～ 第1楽章、第3楽章、第4楽章

ピーター・セルキン(ピアノ)

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1980.2.7 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

オリヴィエ・メシアン (1908～1992):

世の終わりのための四重奏曲～

第6楽章 7つのトランペットのための狂乱の踊り (四重奏)

第8楽章 イエスの不滅性への賛歌 (ピアノとヴァイオリンの二重奏)

ピーター・セルキン(ピアノ)/リチャード・ストルツマン(クラリネット)

パメラ・フランク(ヴァイオリン)/ヨーヨー・マ(チェロ)

(1997.9.30 東京オペラシティ・コンサートホールでのLive)

*** 休憩 ***

ジョルジュ・ビゼー (1838～1875) ～ フランツ・ワックスマン (1906～1967) 編曲: カルメン幻想曲

イーゴリ・オイストラフ(ヴァイオリン)/ナタリア・ツェルトサロヴァ(ピアノ)

(1992.5.16 東京芸術劇場でのLive)

ヨハネス・ブラームス (1833～1897):

ヴァイオリン協奏曲ニ長調 *op.77*

イーゴリ・オイストラフ(ヴァイオリン)

ウルフ・シルマー指揮シュトゥットガルト放送交響楽団

(1997.1.14 ベートーヴェンホールでのLive)